

平成16年度

特別研究実績報告書

1. 研究テーマ

知的障害者入所施設におけるオンブズマン活動の有効性と課題について
＝施設入所者参加型の施設援助への道を探る＝

2. 学科名

社会福祉学科

3. 職・氏名

講師 松平千佳

4. 研究実績（別紙のとおり）

社会福祉学は「人権」思想と切っても切れない関係にありながら、日本の社会福祉において「権利擁護」が社会福祉援助活動の中核的な要素であることが認識されるようになったのは、20世紀の後半であるように思われる。しかし、認識されるようになったにもかかわらず、入所施設では後も絶たず激しい人権侵害がおこなわれており、時に福祉スキャンダルとして報道を通して社会の知るところとなる。今年度においてもっとも大きな知的障害者の人権侵害事件は、福岡の知的障害者施設「カリタスの家」で起きた職員による虐待であろう。オンブズマン活動が、人権思想に基づいた援助方法であることは周知の事実だが、このような現実を考えたときに実際の福祉現場においてはその前提となる人権思想が全く浸透していないのであり、今年度は「人権」に焦点を当て、今一度基本を振り返るためにも研究をおこなった。

研究の成果は、三重県社会福祉協議会の広報誌「福祉みえ」に掲載した。

平成16年1月31日提出

I.人権侵害 ～今現場で何が起きているのか～

1. いま世界では

子どもに近づくと私は2つのことを感じます。
今日のあるがままの子どもへの愛情、そして、
子どもの将来への可能性に対する敬意、この2つのことです。

この言葉は、医者であり、教育学者でもあり、また孤児院の責任者でもあったヤヌシュ・コルチャック先生の言葉です。国連は子どもの権利擁護の先駆者としてコルチャック先生を讃え、1979年の「国際児童年」を「ヤヌシュ・コルチャック年」と名づけています。この短い3行の言葉には児童福祉の原点が凝縮されていると感じます。あるがままの子どもへの深い愛と、未来の可能性に対し頭をたれる気持ち、それはかけがえのない命そのものに対する畏敬の念につながり、すべての人間にとって大切な出発点となるはずです。

しかし、今世界のあちらこちらでは、これとまったく対極にある感情に導かれた残酷な行為がおこなわれています。最近では、明らかに子ども集団をねらったテロ行為まで発生しています。遠い国で起きている出来事であっても、わが国の社会福祉に対し影響を与えることは間違いありません。なぜなら、社会福祉が芽生えそして発展する過程で育ててきた、福祉の理念や理想がもろくも崩されているからです。例えば、日本の社会福祉においては現在「権利擁護」という言葉が盛んに使われ、さまざまな方策の見直しがなされていますが、世界のあちらこちらでは戦争という究極の人権侵害が起きているのです。つまり、「すべての人間は生まれながらにして自由であり、尊厳と権利とについて平等である。だけどもねえ・・・」「人の命はかけがえがない。だけどもねえ・・・」というように多くのエクスキューズが簡単に使われるようになっているのです。このような言い訳は、「社会福祉の守るべき基本的価値はいったいどこに存在するのか」という疑問につながってしまうのではないかと心配します。そして、この心配を裏付けるかのような出来事が実際に福祉の現場で起きているのです。

2. いま福祉の現場では

島根県にある特別養護老人ホームでは、男性介護職員が痴呆症状のある80歳代の男性入所者にバケツをかぶせ、大声で怒鳴り、乱暴にトイレに連れて行くという虐待行為が発覚しました。また、埼玉県にある児童養護施設では施設長と数人の職員が日常的に入所児童に対し、「施設から出て行け」「嫌だったら退寮すれば」などの暴言を浴びせていたことも分かりました。これは新聞に報道された事件ですが、次は実習生の経験を紹介します。知的障害者施設で実習をおこなった学生がこんな話をしてくれました。「お盆期間だったのでショートステイがすごく多かったです。そしたら、ショートの方は怪我させたらだめだからって、8人全員を6畳ぐらいの部屋に閉じ込めて外から鍵をかけちゃったんです。

何もない部屋だから確かに怪我はないと思うんですけど、3日間も何もしないからすごくストレスたまってました。」また、ある母子生活支援施設にいった実習生は、「学習室でテレビを見るときは姿勢を正して見るというのが決まりなんです。その決まりもどうかなあ、って思うんですけど・・・私はテレビ見るとき寝転がったり頬杖ついたりしているから・・・でも子どもたちちゃんとしているんですよ。たまたま先生が見回りに来たとき寝転がっていた子どもがいて、すると先生は何も言わずにブレーカーを落としちゃったんです。ブレーカーをですよ！」

はじめの2つの事件は明らかな虐待行為です。そして実習生が教えてくれた話は、援助という視点から見ると不適切な行為であることは間違いありませんし、権利の侵害にも当たると考えます。いずれにせよ、施設内で圧倒的な権力を持つ職員が力関係において大変非力な入所者（児）に対しおこなった、専門性のかけらも見られない卑劣な行為に他なりません。これまでも福祉施設では多くの人権侵害や虐待がおこなわれてきたことでしょう。ただ不思議なことは、社会福祉に対する関心も高まり、福祉系の学校も増え、援助や支援方法などを教授する専門書も多くあるにもかかわらず、いまだにこのような粗悪な行為が職員から起きるのはなぜなのでしょう。この答えのヒントも実習生が教えてくれました。

「職員さんがあきらめているんです。何かするたびに『本当はこうしちゃいけないんだけどね』とか『もっといい方法あるんだけど』とか『あなたは真似しないでよ、でも仕方ないのよね』とか言うんです。がっかりしました。」ここでもたくさんのエクスキューズが使われています。どうやら、このような言い訳が必要になったり許されたりする原因を突き止めないと、福祉の現場で起きる問題は無くならないようです。

再びコルチャック先生のことばで締めくくりたいと思います。

*自分を絶対に失望させない人物が一人でも存在していることを知っていたら、
子どもの将来や自己認識は違った道をたどるでしょう。*

私たちは誰かを失望させていないでしょうか？

II. 権利擁護と世界人権宣言

1. 権利に対する戸惑い

「2・3年前からでしょうか。急に『権利擁護、権利擁護』って上が言い出して。正直、現場は何のことだか全然分かっていないんですよ。もう少し準備したり勉強したりする時間がほしかったです。」と話すのは特別養護老人ホームの指導員。そうかと思うと「権利擁護の視点からの見直しということで不服申し立ての電話を院内につけたけど、なんとその電話に患者さんがかけていいかどうかを職員会議で決めるんですよ。そんなの権利擁護って言えますか？あっ、いけない。患者様って言わないといけないだった。」と話すのはある精神病院に勤めるワーカー。これら2つの話は、「権利擁護」にまつわるさまざまな問題

を内包しているように思います。現在、「権利擁護」という言葉だけが独り歩きしていると感じるのは私だけでしょうか。

「人権」や「権利」という言葉を聞くとある種の戸惑いを感じる人が多いと思います。それは真剣に考えるべきことと分かっているながらも、感覚的に難しいと思いついて顔をそむけてしまい、抽象的な理解から抜け出せないからではないでしょうか。確かに福祉援助にかかわる者は「人権」への理解は必要不可欠です。しかし、それは痴呆高齢者や精神障害者など特定の人々に対する事柄としてではなく、「私自身がいかに生きるのか」という問題意識から始めなければならないのです。

2. 世界人権宣言と権利擁護

第2次世界大戦後、国連は全力をあげて世界人権宣言をつくりました。それは人権の尊重と平和の間には切れない深い関係があるという認識から生まれました。一人一人の人間がもつ固有性や尊厳は、決して譲ることのできない権利であると承認することが、世界における自由、正義及び平和の基礎になると、人権の共通基準として1948年に採択された国際宣言が世界人権宣言なのです。第1条は次のように書かれています。

すべての人間は、生まれながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利に基づいて平等である。人間は、理性と良心を授けられており、互いに同胞の精神を持って行動しなければならない。

世界大戦という大きな惨事を経験した結果生まれた宣言であることを意識して読むと、その内容の持つ祈りが重く切実に伝わってきます。1行目ではすべての人間のもつ自由、尊厳と権利が宣言されていますが、2行目では、「しなければならない」という強い表現で、我々の責任が強調されていることに目を向けましょう。では、私たちの責任とは何なのでしょう。互いに同胞の精神を持って行動すること、それが良心と理性をもつ私たちの責任なのです。ともすれば社会的に排除されたり、一市民としてもつ当然の権利が侵害されたりする可能性のある人々を社会に内包し、その権利を守ることがわれわれの責任であるとの考えに基づいたとき、私たちは福祉の現場でどのように行動すればいいのかが見えてくるはずなのです。

私の経験を話します。英国の障害児の入所施設でこんな場面に出会いました。脳性まひをもつ車椅子の14歳の女の子の朝の身支度場面です。彼女は好きな男の子がいるため特別におしゃれに敏感でした。腰まである長い髪の毛を、ファッション雑誌を見ながら毎日違う形にアレンジするのです。しかし彼女一人ではできません。ケアスタッフが2名がかりで、30分以上かけて彼女の髪を編み上げていくのです。仕上がったときの満足そうな顔。学校に行こうと力いっぱい車椅子をこぐ彼女の姿。そのとき感じた若々しいエネルギーを忘れることはできません。ケアスタッフは福祉の専門資格を持っているわけでもな

く、障害児の権利をどのように擁護すべきか学習したわけでもありません。ただ、恋する思春期の子どもの自然な気持ちを受け止め、自分にもそういう経験があったことを思い出し、子どもの心に共感し、共感に基づく自然な行動をとっているだけなのです。この当たり前すぎるぐらい当たり前の行為がなぜ日本では難しいのでしょうか。

人権や権利という言葉は決して額に入れて壁に飾っておくようなものではありません。自分自身がかけがえのない固有性を持っているという自覚が、目の前にいる人もまた尊厳と権利を持つ人間なのだという気づきにつながるのです。そして、良心と理性を持つ私の責任を自覚し、同胞として私は何をすべきなのか考え行動し、これを日々の営みの中で繰り返し蓄積していくこと、これが結果として、権利を擁護する自然な援助や支援になっていくのだと思います。

Ⅲ. なぜ人権侵害は起きてしまうのか

1. ある実習生の自己覚知から

先日、社会福祉援助技術現場実習を振り返り学生がこんな話をしてくれました。「2回の実習を経験した自分を振り返って一番気づくことは、私の心の中にはたくさんの偏見があったんだってことなんです。重症心身障害児施設に実習に行くことが決まったときなんか、宇宙人にでも会いに行くような気持ちだったんですよ。」

このようなスタートを切った学生でしたが、重症心身障害児施設で大切なことを学んで帰ってきました。介護技術を持たない彼女にとって実習は不安だらけでしたが、「私は彼らに何かしてあげなければならない」とか「私は援助の方法を学びに来ているのだ」という気構えや気負いから開放され、同じ「人」として同じ時間と空間を共有することを楽しもう、という気持ちに変わったときから障害を持つ人々との関係が全く違うものになったといいます。「～をしてあげる」のではなく、「一緒に歌う」「一緒に本を読む」「一緒に食べる」など、さまざまな生活場面を共有するというこの行為こそ生活の場では大事なものであり、クライアントの個の尊厳を認めたり、すべての人間が平等であることへの気づきにつながっていくと思うと、彼女は実習から帰ってきて話しました。彼女は福祉援助者としての思考を少し培ったのです。

「でも、この時点ではまだまだ私には障害者に対する偏見があったんです。」と彼女は言葉を続けます。「それに気づいたのは次の実習で、知的障害者施設に行ったときなんです。そこは全員個室で、私思わず『すごい！』って叫んでいました。その施設のグループホームを見学したときも素敵な一軒家でまた『すごい！』って。そのとき私は自分の中にある偏見に気づきました。だって私も自宅では個室をもらっています。でも知的障害者だと個室に驚いてしまうのです。個室を見て思わず出た『すごい！』は、実は『贅沢！』っていう気持ちだったと思うのです。グループホームについてもよくよく考えると私の自宅よりきれいな家を見て、『何で？』って思ったんだと思います。つまり、私の中には障害者なのだから、私たちの生活よりか多少不便であったり質素であったりすることが当たり

前、そんな気持ちがあるのだと思います。いつの間にか私の中に『ここは施設なのだから仕方がない』とか、『職員の都合を考えると少しの我慢は仕方がない』などという考えがしっかりと忍び込んでいたのですね。」

2. 福祉施設に存在する特例法とソーシャルワークマインド

このような考えは、クライアントの人権侵害への第1歩につながる考えです。これまで起きてきた多くの施設内虐待の根底には、このような「ここは施設なんだからこのような行為が許される」とか「彼らは私たちとは違うのだから良いのだ」というような、一般社会とはかけ離れた福祉施設だけにおいて通用する、いわば特例法が数多く支配しているようです。クライアントの権利擁護活動を阻むこのような特例法を施設からなくすためには、どのような取り組みが必要なのでしょうか。

私は福祉援助者が皆、自分は社会福祉の援助実践を担う一員であるという自覚と帰属意識を持つことが、とても重要であると考えようになりました。福祉援助者が持つべきそのような自覚と帰属意識を、ソーシャルワークマインドと呼ぶことができるかもしれません。ソーシャルワークマインドの重要性を、2000年にモントリオールにおいて開かれた、国際ソーシャルワーカー連盟の大会の中で採択されたソーシャルワークの定義の一部、倫理に関する部分を使って説明したいと思います。

ソーシャルワークは人道主義と民主主義思想に根付いて発展しているため、ソーシャルワークの価値はすべての人間が平等であること、価値があること、尊厳があること、という信念に基づいている。

もしも、日本にいる福祉援助者一人ひとりが、ソーシャルワークマインドを形成することができれば、上記した人間の平等、人間の価値、人間の尊厳がソーシャルワークの発展を可能にした基盤であることが深く認識できるでしょう。そして、福祉援助の仕事はこの思想に立脚して初めて可能になるのだから、それに反するような行為は決して許されないということが分かるでしょう。また、福祉援助を担う私は、日本で、アジアで、そして世界において働く何万もの福祉援助者の一員なんだという帰属意識は、この職業を誇りに思い、そしてこの職業に対する社会的評価を下げないように、自分の行為を律し向上を目指し努力する方向に自分を向けていくことになるでしょう。そのようなソーシャルワークマインドを持つ福祉援助者の集団を想像してみてください。同志として互いに支えあい、大きなグループ力を発揮することは間違いありません。

IV. 社会福祉と理想

1. 理想を描くことの重要性

福祉教育と研究の末端に身をおく者として、目指すべき社会のあり方など理想をあまり語らなくなったと感じています。理想を語る代わりに、現存する制度や政策をどのように

個人のニーズに合わせていくのかについて教え考えています。しかし、社会福祉の始まりを紐解くと、理想を掲げ活躍した先人たちの情熱的な活動を多く見つけます。活動は「無」からの出発でした。頼るべき制度も法律も機関も施設も何もないのだけれど、「気づいた者」として先人たちは社会のさまざまな問題に立ち向かっていったのです。多くの苦難がありました。彼らは強い理想に支えられ先駆的な活動を行い、そして現在の社会福祉の根幹を形成したのです。私たち福祉援助者にとって、援助活動を通してどのような社会を形成したいと願うのか、理想を描くことはとても重要です。

2000年に、英国における「最も優れたソーシャルワーカー」に選ばれたボブ・ホルマンという人物を紹介したいと思います。ホルマン氏は、大学で社会政策を教える教授でしたが、グラスゴウにある犯罪発生率の高い地域に住居を構え、エスターハウスと呼ばれる活動拠点を作り、非行に走る児童、犯罪に手を染める環境にいる青年たちのための地域プロジェクトを立案し実践したのです。ゼロからの出発でしたが、彼の活動は徐々に芽を結び、子どもたちを犯罪から遠ざけるだけでなく、困難を抱える親たちの支えにもなり、プロジェクトは地域の貧困家族を一つにつなぎとめる役割を果たしました。またエスター荒れた地域に市民社会を形成する大きな力となりました。2004年に引退するまでホルマン氏は、毎週150人から300人の子どもたちに会っていました。そして、「私なしでもエスターハウスは十分に運営できるようになったので」と、地域の人々に運営の一切を譲渡し彼は退いたのです。

ホルマン氏は福祉援助者を目指す人たちにこのように話します。「もしもあなたが真剣に、困難にある人々に対し何かしたいと考えるならば、まず始めに彼ら自身の語りをしっかり聴くことから始めなければなりません。」実際、ホルマン氏はクライアント自身の語りを聞くだけではなく、クライアント自身が語ることを積極的に促しました。聞くことによってクライアントに対する理解が生まれると考えていたホルマン氏は、政府の諮問機関の要人になっても、決して現場から遠ざかることはなかったのです。私たちはどうでしょうか。時間を気にせず、ゆっくりと子どもたちや親、また高齢者や障害者の語りを聞いていますか？ 予定が詰まっているからと、「また後でね」と守れない約束でごまかしてはいないでしょうか。書類や報告だけで、クライアントが理解できた気になっていないでしょうか。

2. 理想の持つ力

ホルマン氏は明確に理想社会を描いていました。だから困難な活動を推し進めることができたのです。その社会で暮らす人々のあり方についても明確なビジョンがありました。だから彼はどのようにクライアントに接すればいいのか知っていたのです。これほど社会福祉には理想が大切であるにもかかわらず、なかなか教員同士でも話ができません。少し憂鬱になって考えていると、沼津市の母子生活支援施設で実習を行った学生がうれしい話を教えてくれました。「小学生の女の子が園長のおひざに座ってお話しをしていたんです。女の子はとてもうれしそうにニコニコ顔で一生懸命話しをしていました。園長は『ウン、ウン』とうなづきながら話を聞いていました。すると突然その女の子は『パパ!』と呼んで

園長に抱きついたんです。感動的な場面でした。その女の子の父親はお母さんにも彼女にも暴力を振るっていたんです。あのように話を聞いてもらった経験ってきっとないと思うのです。私は今回の実習で理想とするすばらしい援助者を見つけました。」きっとこの学生は働き出すと多くの困難に直面するでしょう。しかし、「理想とする援助者像」が彼女の中に存在する限り、彼女は流されず自分を律することができると思います。ホルマン氏はこのようにも述べています。

私の未来への願いは、ソーシャルワークやコミュニティワークが価値に根付いて出発することです。福祉援助者は、専門技術屋以上のものでなくてはならないのです。

さまざまな場面でさまざまな人々と大いに理想について語りたいものです。